

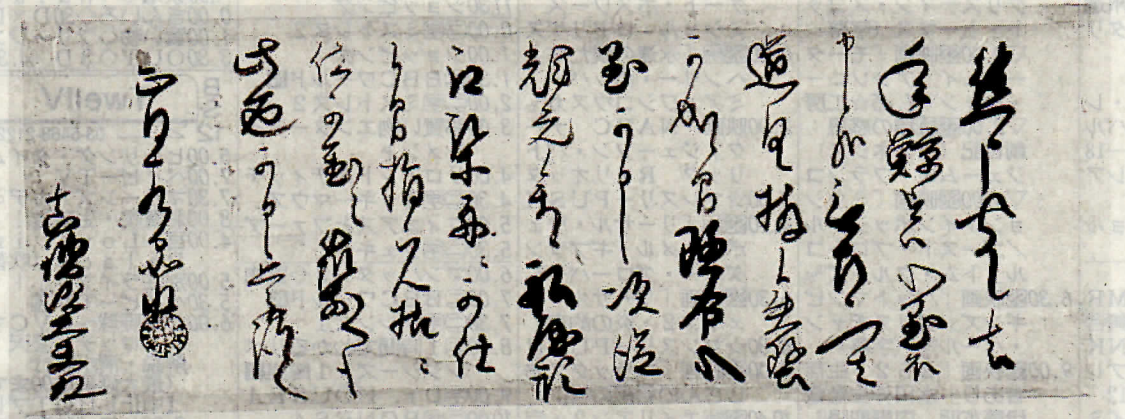


7

茶の湯などを通じてキリシタン大名と付き合う中、官兵衛はキリスト教への関心を徐々に深め、天正12(1584)年、高山右近らの勧めで入信する。「汝の敵を愛せよ」と説く西洋の教えが相手に寛容に接する自分の心と何ら変わらぬことに驚きつつ、官兵衛はキリスト教を受け入れる。西洋の合理的な考え方に興味を持ち、西洋技術の習得、鉄砲・火薬の入手なども期待したのであろう。亀甲車と呼ばれる戦車を取り入れ、戦いで用いている。

官兵衛が入信していたことを示すものとして、国内では福岡県朝倉市の円清寺の「黒田如水像」と洗礼名シメオン・シヨスイ(Simeon

## キリシタンの心

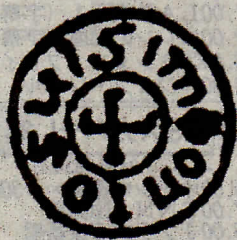


Josui)のローマ字印が押された書状が残っている。一方、海外には宣教師が残した記録、インド、ヨーロッパに送った書簡、報告書があり、官兵衛のキリシタンとしての活動、考え方を具体的に知ることができる。

「ルイス・フロイスの日本史」は戦場での官兵衛の姿を次のように伝える。官兵衛は

## 布教活動を主導、支援

九州攻めの戦場に修道士を帯同し、時間が許す限り手元に置き、自ら世話をしながら兵たちに説教を聞かせた。官兵衛が不慣れた手つきで十字を切り、祈り終えると頭と両手を床に着けひれ伏す姿は真心がこもったもので、一同に感銘を与えずにはおかなかった。さらに陣営内の武将たちに



黒田如水ローマ字印書状(上)。印象部分を拡大復元したもの(右)は「シメオン・シヨスイ」とローマ字表記が読める(慶長8(1603)年以後(福岡市博物館所蔵))

書状を送り、自分のところに説教を聴きにくるよう勧め、説教を聴いた者についてはその回数、理解の程度、受洗を決意した日にちを把握していた。これらから官兵衛の一端がうかがえる。また、「予はそこの国の住民がすべてキリシタンのみから成り立つよう定めようである。最後までキリシタンを買い取らねばならぬ」と述べ、キリスト教に基づき国を作りたいと定めます。

(播磨)の黒田武士顕彰会理事 今藤久夫

次回(9月5日)に掲載予定